

令和3年11月9日

開会時刻：午後2時00分

閉会時刻：午後3時56分

令和3年度大田区青少年問題協議会  
(第2回)

○今井地域力推進部長 定刻となりましたので、ただいまより令和3年度第2回大田区青少年問題協議会を開会させていただきます。

本日はお忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。私は地域力推進部長の今井と申します。どうぞよろしく願いいたします。

この協議会は公開原則によりまして、傍聴制度を導入しております。

それでは、開会に当たりまして、本協議会の会長であります松原区長より御挨拶を申し上げます。よろしく願いします。

○松原区長 本日は大変お忙しいところ、御出席をいただきましてありがとうございます。また、コロナの関係で皆様に御協力をいただきますことに、心から厚く御礼を申し上げたいと思います。

おかげさまで、大田区はワクチン接種を2回済ました方が、12歳以上ですが、83.9%という形になりました。大変高い数字になりました。これも皆様の御協力の賜物と思っております。また3回目の接種ということも、まだ正式ではないんですが、国も準備は進めるということで我々としてはやらさせていただいているところでございます。御承知のとおり、お医者さんから始めて高齢者、高齢施設に入っていられる方、その後一般の方という形でまいります。早ければ年内からお医者さんたちが打ち出すという形になっております。我々としてはしっかりとコロナ対策に臨んでまいりたいと思いますので、よろしく願いを申し上げます。

本当に11月に入ってから、非常に寒さが冷え込むようになってまいりました。皆様におかれましては、十分お気をつけていただければと思います。また委員の皆様には、日頃より大田区の青少年健全育成に御尽力を賜り、深く感謝を申し上げます。今月、11月は、「子供・若者育成支援推進強調月間」でございます。内閣府は「子供・若者育成支援推進大綱」において、毎年11月を「子供・若者育成支援推進強調月間」として設定し、子供・若者育成支援に関する取組を国民運動として総合的に展開する契機にすることとしております。この強調月間においては、これまでも青少年対策地区委員会の皆様をはじめ、地域及び関係機関の皆様子どもを犯罪や有害な環境から守るための運動や、子ども・若者育成支援のための諸活動に連携して取り組んでいただいております。今後も地域が一体となって子どもたちを見守り、安全安心な生活を送ることができるように区、地域及び関係機関の皆様と連携をし、取り組んでまいりたいと存じます。

本日は第1回本協議会において決定した年間テーマであります、「困難を有する子ども・若者やその家族に対する切れ目のない支援及び地域ネットワークの強化」に関連し、「コロナ禍における子ども・若者への伴走支援と地域連携のあり方について」をテーマとした講演会を開催する運びとなりました。本講演会では、名古屋市の子ども・若者総合相談センター統括責任者の渡辺ゆりか様に御登壇をいただき、名古屋市における子ども・若者を対象とした相談センターの取組を通して、コロナ禍における子ども・若者への適切な支援や、地域連携の在り方について皆様と考えてまいりたいと存じます。

また、昨年度の青少年問題協議会において御講演をいただきました井村良英様にも本日はお越しいただいております。講演会テーマ及び大田区における子ども・若者支援の方向性等についても理解を深めるためのサポートをお願いしております。私は大田区においても困難を有する子ども・若者に対して、包括的な支援を行う必要性を強く感じており、総合相談窓口と居場所づくりの整備に向けて、現在取り組んでいるところでございます。本日は、委員の皆様のご豊富な経験や幅広い知見から御意見をいただくことを期待しております。全ての子ども・若者が健やかに育つための支援の在り方や、その方向性について、さらなる検討を進めていくために、引き続き、御協力をお願いいたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

○今井地域力推進部長 ありがとうございます。会議に先立ちまして、新任の委員を御紹介いたします。お手元の資料1、大田区青少年問題協議会委員名簿を御覧ください。池上警察署長、高橋雅代様が就任されましたので、御報告いたします。本日、代理出席をいただいております。そのほか、大森、田園調布、蒲田警察署長及び区立中学校校長会会長の皆様は本日、代理出席をいただいております。なお、区民公募委員の東使勇樹様はオンラインで御出席をいただいております。

委員の紹介は以上でございます。

続きまして、お手元に配付いたしました資料の御確認をお願いいたします。まず本日の次第。次に資料1、大田区青少年問題協議会委員名簿。次に、講演資料、コロナ禍における子ども・若者への伴走支援と地域連携のあり方について。次に、参考資料、「環境支援型」就労支援。最後に資料2、（仮称）大田区子ども・若者総合相談窓口整備の考え方（案）について。以上となりますが、資料はおそろいでしょうか。

（「はい」と呼ぶ者あり）

○今井地域力推進部長 それでは、講演会に入らせていただきます。本日の講演テーマは、コロナ禍における子ども・若者への伴走支援と地域連携のあり方についてと題しまして、一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト代表理事であり、名古屋市子ども・若者総合相談センター統括責任者の渡辺ゆりか様、それから認定特定非営利活動法人育て上げネット執行役員、井村良英様のお二人に講師として御講演をいただきます。

渡辺様は、平成23年に草の根ささえあいプロジェクトを立ち上げ、制度のはざままで支援の手が届かない子ども・若者を孤立させないためのボランティアバンクや、地域のネットワークをつなげるためのワークショップなどを実施され、平成25年からは子ども・若者を対象とした相談のワンストップセンター「名古屋市子ども・若者総合相談センター」を開所、平成31年までセンター長として御在任され、そののち、働きたい若者と企業をつなぐため、名古屋市若者・企業リンクサポート事業所長に御就任され、御活躍されております。本日、渡辺様につきましてはオンラインでの御講演となっております。

井村様は、20年以上にわたり若者支援の活動をされており、内閣府、厚生労働省をはじめ、名古屋市、立川市、国分寺市、北九州市など複数の自治体において検討委員会委員、アドバイザーとして困難を抱える若者の自立支援に向けた体制整備に対する支援を含め、幅広く御活躍されております。また昨年度、第2回の本協議会において、困難を有する子ども・若者に対する地域における支援のあり方をテーマに御講演をいただくとともに、大田区における子ども・若者総合相談窓口の設置についても幅広い視点からアドバイスをいただいております。

本日は、お二人にコロナ禍における子ども・若者への伴走支援と地域連携のあり方について、お話をいただきたいと思っております。

それでは、渡辺様、井村様、どうぞよろしく願いいたします。

○渡辺講師 よろしく願いいたします。

○井村講師 お願いします。では、二人で進めさせていただきます。紹介のほうは今、部長から丁寧な御紹介ありましたので、早速中身に入らせていただきたいと思っております。

50分、僕と渡辺さんの二人のセッション形式で今日は進めさせていただければと考えています。と申しますのが、今、お手元にありますように80ページ近い資料で、貴重なノウハウを今回、渡辺さんが大公開してくださいました。大田区の応援をしてくださいと渡辺さんをお願いしたからなんですけれども、まず、なぜ渡辺さんをお願いした

のかという話からさせていただきます。

先ほど、区長からも大田区の子ども・若者の包括的な支援の必要性を感じているというお話がありましたけれども、僕も現場レベルですけども、必要性を感じているんです。例えば、最近の話だと僕今日、立川から電車乗ってきたんですけど、ちょっと怖いですよ、今、電車乗ると。皆さんいかがでしょうか。今、ニュースとかでも、どう電車内の警備を強化するかという話をしていますし、実際進むと思うんですけど、ぜひ今日は傍聴の方も含めて、私は子ども・若者支援をずっとやってきた立場からの提案ですが、果たして警備とか監視カメラをたくさん設置することで、電車内で寂しい思いを持った若者が、家族ともつながりがなくて心中しようとするのを防ごうとすることができるんでしょうかということ、ぜひ一緒に考えていただきたいんですね。

前回僕がこの会議に出席させていただいたときは区長がたしかシングルマザーの御家庭のNHKのニュースを御覧になられて、孤立、孤独の現状が進んでいるというお話を区長の実感を交えてお話しされていたことをよく覚えているんですけども、今日の朝のニュースでは先日の電車内での事件に関連して、OECDの調査に触れられていて、日本で社会的孤立を抱えると感じて生活されている人たちが断トツトップで、15.3%いると紹介されていました。また、法務省の調べというふうに紹介されていたんですけども、犯罪を犯した時点で、その方が友達がいなかったという人が54%、仕事をしていなかった、無職の人が75%、あと収入がなかったという人が60%いるという、何か仕事がなく友達がいない人が犯罪を犯すということではなくて、そういう孤立状態に陥っている人が、結果、犯罪になってしまうんだというようなことが語られていたのですが、子ども若者支援において、まさにどうしよう、今日はそういう話だと思います。

ちょっと前置きが長くなってしまっているのですが、今日1冊、ちょっと本を紹介したいなと思いついて持ってきました。後で入り口のほうに置いておきますけれども、今年の8月末に出たオランダ・ミラクルという本です。若者支援と一見全然関係ないオランダの高齢者福祉についてのことが詳しく載った分厚い本なんですけども、僕はこの本を読んでいて、子ども若者支援の未来について参考になるなと感じています。区長がおっしゃった子ども・若者を包括的に地域で支援する話と、今起こっている電車内で寂しくて心中を一緒にしようとする人たちをどうするのかという話、昨日は熊本で大人の方がそういう事件を起こしてしまいましたが、もはや孤立、孤独の問題って、子どもとか若者とか大人だけの問題ではないということを感じています。この本

には何が書いてあるのかと端的に申し上げますと、2015年まではオランダは、福祉は国が面倒を見ていたということが書いてあります。でも2015年からコペルニクスの転換が行われて、国が介護保険等で面倒を見るのは最後だと。じゃあ、何が最初なのかというと、アセットベースト・アプローチと書いてあるんですけど、本人のやりたい気持ちとかできることというのを中心に置いて、かつ地域内の支える力をどういかしていくのか、から考えることを始める、まず御本人さんたちの持っている力をどう生かすのかという、そういうところを最初にして、次に地域ボランティアの人たちをつなげて、最後に自治体や国が助けるというような、そういう制度に展開したという話を書いてあって、常々我々も、渡辺さんもそうですけども、孤立、孤独を抱える若者たちに関わっているときに、やっぱり人とのつながりが大事なんじゃないのというのを思っていて、分野は違うのですが参考になるかとも思い紹介をさせていただきました。今日御紹介します渡辺さんは、名古屋市が設置した子ども・若者総合相談センターのセンター長で、地域と共に子ども若者を支える取り組みを立ち上げて来られた方です。そういう渡辺さんの話が地域力を掲げる大田区の皆さんに参考になるんじゃないかなというふうに思いました、今日一緒にさせていただくことになりました。

○渡辺講師 皆様、初めまして。ただいま井村さんが身に余るというかちょっと誇大な御紹介をしてくださったんですけれども、私、一般社団法人草の根ささえあいプロジェクトという団体を名古屋で2011年から立ち上げて活動しています、渡辺と申します。どうぞよろしく願いいたします。

2011年、ちょうど震災の年から10年たった、まだ未熟な団体なんですね。その後、その2011年に立ち上げた、その草の根ささえあいプロジェクトは何のために立ち上げたかということ、孤立をテーマに、その制度と制度のはざまや人と人のすき間に陥って一人で苦しんでいる人たちを応援したいという思いで立ち上がったんですけれども、そこで応援させていただく40代、50代の方々のお話を聞けば聞くほど、やはり子ども時代に何かしらこの方を理解する大人がそばにいたら、こんなことにならなかったのになということがたくさんたくさんエピソードとして聞かれたんですね。その方々は、誰一人、1ミリも悪くないところから始まっていることが多くて、孤立していたり、困窮していたり、生活保護を受けていたり、犯罪を犯してしまったりした方であっても、子供の時代の早期、若者時代の早期に私たちがその方々に出会って

いたらという思いがどんどん強くなりまして、2013年に名古屋市が子ども・若者育成支援推進法の下、子ども・若者総合相談センターを立ち上げ、民間委託するとうきに私たちの団体が手を挙げさせていただいて、そこからスタートしています。なので、子ども・若者総合相談センターとしては8年目を迎えています。実は、その立ち上げ当初から井村さんには大変お世話になっていまして、まだ本当に私たちが右も左も分からないところをスーパーバイジングしてくださり、地域の実情を教えてください、若者支援の方向性を示してくださったのが井村さんで、そこから本当に助けをいただいたり、一緒に考えさせていただいたり、アドバイスをいただいたりという関係が続いています。ですので、井村さんのお話の中から大田区の皆様の熱い思いとか取組とか、あと区長様が30年以上の保護司様をされているということで、井村さんや私たちの大先輩なんだということは、よくよくお話を聞いて、拝聴していまして、そんな私たちよりずっと先に行く先進事例の皆様に、今日私がお話しするというのも大変おこがましい気持ちなんですけれども、名古屋ではこんな取組をしていますが、皆様のところはどうかということもお尋ねしながら、一緒に学んでいく時間になればというふうに思っています。よろしく願いいたします。

○井村講師 ありがとうございます。今日はテーマを四つ用意しています。時間も限られていますので、テンポよくいきたいと思えます。まず資料の2ページから4ページ目、コロナ禍における子ども・若者の現状について、名古屋の子若センターで関わられておられる中で、感じてこられたことについてお話をさせていただいてもよろしいですか。

○渡辺講師 分かりました、ありがとうございます。私たち子ども・若者総合相談センター、2013年に立ち上がりました。そこから実は相談件数が下がったことはなくて、ずっと右肩上がりなんです。その中でコロナ禍、コロナの始まり、ちょっと状況が長期化するというふうに私たちが分かった頃からでしょうか、さらに相談件数としては右肩に跳ね上がり、とはいえ爆発的な増え方ではないですね。じわっと増えつつ、でも1件1件に深刻さがどンドンどンドン、じわじわと、本当にじわじわとなんですけど、してくる感じになっています。とはいえ、実は私はコロナだから急に相談が増えたとか、子どもたちが深刻になったという側面、もちろんありますけれども、一方でこのじんわりとした増え方や相談内容を聞けば聞くたび、もともとあった問題が顕在化したのではないかというふうに思っています。なので、私たちコロナ禍においても子ども・若者支援、2013年に立ち上げた当初と同じ思いで、でもさらに目を凝ら

し丁寧にというところは、もちろん肝に銘じるんですけども、同じように進めています。

私たちが大事にしていることなので少しお話しさせていただければというふうに思うんですが、こちらのごあいさつの文章、今、名古屋市子ども・若者総合相談センターのトップページに、今でも立ち上げ当初と同じ文言でごあいさつとして載せさせていただいていますけれども、長いので赤字のところだけ御紹介すると、私たちは名古屋市内に1か所の子若センターですが、市内16区あるんですね。その16区子ども・若者の悩みを1か所でお待ちするので、来たら相談に乗りますよということも言うても全く意味がないよねというふうに初めに思いまして、その方の、その若者の住んでいる生活圏に出かけ、家庭訪問し、その方が安心できる近所で一緒に行動したり経験をしたりするというアウトリーチを大事にしていますというのが1個目です。

二つ目は、今日の次のテーマにもつながってくるのかと思うんですが、市内には、名古屋市内は恵まれたことにたくさんの企業やNPOが存在しています。あと支援団体が存在しています。それらの方々と手を組まないことには何も始まらないなというのは初めから分かっていて、既にある、その方々の機能や優しさや、その人の支援の経験というのをつなぎ合わせて、得意を持ち寄る優しいネットワークを編んでいくためのハブとしての機関になればと思って書いたのが2番目の思いです。

三つ目が、社会に押し出す、引っ張り出すのではなく、足場を一步一步踏み固めながら、その人のペースで進むことに寄り添うというふうに書かせていただきました。私、これを名古屋市の行政の方々と一緒に合意ができたことが、本当に大きかったなというふうに思っておりまして、今でも市側と、私たち支援団体側の、民間の支援団体の者と、ここの思いが一致しているんですね。なので、復学率何%とか、就職率何%ということではなく、その一人一人が、どうその人らしい一歩を進んだか、それを大人がどう応援できたかということの評価にしようということを決められたのは、とても大きかったと思います。なので、教育機会確保法ができてからますますですけども、子どもを学校に戻すことを私たちのミッションにするのではなく、例えば、1年、2年、ほぼ自室に引き籠もってゲームをしていて、母親ももう半年に1回ぐらいしか顔を見ないというふうに言っていたお子さんが、私たちが一生懸命ボランティアさんと一緒に家庭訪問で通ったところ、リビングで待っていてくれて、一緒にゲームができるようになったとすると、それはその子どもや家族にとって、とてつもない

大きな一歩だというふうに考えて、その一人一人の一歩を大事にするということを念頭に置いて、相談センターをしています。

今言った件数が右肩上がりでということで、少し件数もつけさせていただきました。2年ぐらい前から延べ相談件数は1万件を超えまして、大変なアクション数なんです。が、それより私たちが、この名古屋の子若センターとして特徴的だなと思うのは、やっぱり連携機関数の多さ、ネットワークを組んでいる支援機関数の多さですね。民間、公にかかわらず、一個人がやっている小さな団体も含めです。そのバリエーションも含め、数含め、特徴かなというふうに思っているのと、それらの機関の方々と常に話をしている。会議室で口の字に囲んだケース会議ではなく、何かちょっと集まって、この子のために、ときに御本人も入れて、ここはどうするというふうに話すというのを私たちはケース会議と呼んでいるんですが、その回数も多いというのが特徴的。あとアウトリーチはもちろんなんですが、最後に、この後お話しできるのかなと思いますが、ボランティアさんがすごく稼働してくれています。今ボランティアさんが名古屋市子ども・若者総合相談センターに200名強登録してくださっています。多くの地域のボランティアバンクが機能しないことを悩んでいるというふうにお聞きしたんですが、うちに関していえば、稼働数は608件です。1年、365日なので、実質センターでボランティアさんの姿を見ない日はないという稼働数になっていて、そこは私たちの子若センターの大きな特徴になっているかと思しますので、後ほどお話できたらと思います。

これが井村さんがおっしゃってくださった最後の資料になるかと思うんですが、特にコロナ禍ますますだと思んですが、私たちが出会う若者たち、子ども・若者総合相談センターで出会う若者のほとんどが圧倒的な経験からの疎外を受けているというふうに感じます。ごめんなさい、これ配布資料から少しバージョンアップしているのを、私前のバージョンのスライドでお渡ししてしまったので、後で気づいて変わっているところを青字にしてあるんですね。なので、できたら画面を見ていただけたら嬉しいんですけども。私たちが出会う若者たちは、経済的な困窮や核家族化の影響もあるんだと思いますが、圧倒的に本当に経験から疎外されている。高校生なんだけれども、本物の海を見たことなく、海は映像でしか見たことないという子がいたりとか、あとは二番目の子は27歳の女の子だったんですけど、ちょうど面談日がお誕生日だったことに記録から気づいたスタッフが、近所のコンビニで小さなロールケーキ

を買ってきて、ろうそくを立てて、そこにいるスタッフでハッピーバースデーを歌って、彼女に6色の火を消してもらって、誕生日をお祝いしたんですね。彼女が泣き出して、どうしたのと聞いたら、私生まれて27年間、ケーキでお祝いしてもらったのは初めてですというふうにおっしゃっていました。あと運動会に両親が来てくれたことがなく、みんながグラウンドでお弁当を食べているところを自分は教室でコンビニ弁当を食べていましたという子もいます。

そういう当たり前の経験が家族機能が果たせないことで果たせないというパターンもあるんですけど、青字のほうはすごく恵まれた家庭、一般的に見て何も問題がないかに見える御家庭なんですけど、その御両親が全てのことを決めてしまい、ルールを敷いてしまい、もう本当にかんじがらめになって、何一つ経験をしてきていないという子がものすごく増えていて、これはこれで一つの悲劇だなというふうに私は思っています。この間も33歳の女の子が、恥ずかしいんですけどというふうに言って、私が初めてお財布からお金を出して買い物をしたのは大学1年生のときでしたと。それまでは両親がお金持たせてくれなかった。大学の文化祭で買い出しに行こうぜと友達に言われて、初めて恐る恐るお金を使ったというふうにおっしゃっていたんですね。

あとは、そういう親からのかんじがらめの経験の不足もあるんですけど、もうこれは本当に私が見ていて一番つらいんですけど、親御さんも含め、御本人も含め、今までの右肩上がりの高度経済成長の、小中高と出て正社員になり、20代で結婚して子どもを産んで家を持ってということから、1ミリも外れてはならぬという日本のシナリオ。今そういうことが後退していることは親御さんも御本人も分かりつつ、1ミリも出られない。そこにある程度、高校生、大学生ぐらいまでに適応できる能力がある子だとさらに悲劇で、そこまではうまくいったので、次の就職の一步も絶対に失敗ができないと思うと、もう怖くて怖くて足がすくんで、そこから何年も引き籠もりになってしまうという方もたくさんお見受けをします。そういう方も、圧倒的にそのシナリオ以外の人生を知らないので経験が不足していると言えるんですね。これらの経験の不足は、記憶の不足とも私たち呼んでいるんですけど、記憶からの排除。何かしら温かい思いを誰かと交わしたり、何かしら文化祭の中で失敗したのを肩をたたいて友達に励ましてもらったり、お母さんに抱きしめられたり、自由にやってみて失敗したことが、また大人がすくい上げてくれたりという経験がないので、次に進むことということの選択がとても難しい。土台がぐらぐらなまま、何か学齢期過ぎたら急に働けと言われて

た。でも、その自分の少ない経験の中で、自分が何をしたらよいか分からない。どうしたらいいか分からない。そもそも何をチョイスしていいか分からないという状況に、若者がますます陥っているような気がします。

私たち、それを関係性の困窮と呼ぶんですが、関係性の困窮はますます経験や記憶からの排除を生み出しますので、ここは明らかに悪循環のループが起きているんですね。私が一番悲しいのは、そういう子どもたち、10代の後半ぐらいまで憤っているんです。どうして私だけ親が片親なのか。何で私だけディズニーランドに行ったことがないのか。どうして私は誕生日プレゼントをもらえないのか。何で私には友達が一人もいないのか。憤っているんですけど、20代に差しかかって、20代を2、3超えた頃ですね、皆さんこう言い始めます。どうせ私なんて。どうせ私なんて結婚できないとか、どうせ僕なんて働けないですとか、正社員になれっこないですとか。どうせ私、一生友達できないし。まあ、いいですという諦めを言い始めるんですね。できれば、その前に誰かが世の中は捨てたものではないし、あなたの経験の積み上げは今から僕たちが一緒にできると。そうすれば、必ずあなたのよさが生きる、あなたが咲ける場所はあるんだというふうに伝える必要があると切実に思います。

○井村講師 ありがとうございます。大田区の今年のテーマに切れ目のない支援というテーマがあると思います。渡辺さんは関係性の困窮、と話されましたが、次のスライドの5ページに、渡辺さん、あきらめの谷と書いてくださっているんですよ。それはさっきおっしゃった、どうせ私なんてみたいなふうになっちゃうという、そういうことでしょうか。

○渡辺講師 そうですね、これ孤立の川の図といって、草の根ささえあいプロジェクトが120人の、一たん孤立したり引き籠もったり、不登校になったりした経験があり、でも今は誰かとつながってインタビューが可能な120人にお話を聞いて作ったフローチャートなんですね。その方々のエピソードから共通項を抜き出し、全部を逐語にした後に、手間暇かけたんですが、共通項を抜き出して作ったのがこの図になります。先ほどの、図とつながるんですけれども、そのご本人の孤立の穴に落ちる方々、引き籠もったり、不登校になったり、ニート状態が長引いたりする若者たちのほとんど、もう本当に100%に近い方々が、何かしらの個人要因か環境要因を持っていることが分かりました。このフローの一番上ですね。個人要因は、軽度の見過ごされがちな発達障害や知的障害だったり、どうしても自分では努力しても克服できないコミュニ

ケーションの不足だったりします。環境要因は、虐待を受けた、ひとり親家庭で寂しかった、あと激しいいじめを受けた、ネグレクトを受けた、貧困家庭に育ったなどの、どちらも1ミリも本人のせいではない要因です。ですけれど、それは本当に目に見えにくいので、肢体不自由の方が車椅子に乗っていたり、白杖をついていたりとすると困難なのは分かるんですが、それらの背景というのは普通の、この困難を抱えた体が丈夫な若者には表面化しません。なので、それに対して日本人が言いがちなのは、もうちょっと努力すれば何とかなるんじゃないのとか。あるいは、それはもうちょっと空気読んだらとか、もっと勉強すればついていけるはずでしょうという、あなたが怠けている、あなたの人間性が低いというふうに言われがちなんです。どうも私たち子若センターで出会っている子どもたちを見ていると、それをライフステージごとに経験している。もう本当に家庭、幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校、社会人になって、もうまたかと思うわけです、彼らとしては。ループとしては、トラブルを起こして、まあじゃあいいと教室を出ていったり、仕事を短期で辞めたり、ますます人から嫌われてしまう。右側に矢印が派生しているループは、それに対してどうせやっぱりね、自分って駄目だよねということで長期に引き籠もってしまう方。でもたまに外に出ようと意を決し外出したりする。誰も人生を諦めていないので、そう思って行動するんですけど、他人に相談してもうまくいくはずないと思うので、自分でこっそりチャレンジしては失敗し、また自分に自信をなくしていくというループがあるんですね。それを繰り返している子どもたち・若者たちは、人間なので、しかも若いので、経験もないので、そんなに何周も何周もそのループに耐えられるわけではないのは御想像がつくと思うんですけど、本当にそれで、何周かしたときに、もういいと、どうせ大人は助けてくれないし、誰かにSOSを出したって、おまえが悪いって言われちゃうし、もういいですというふうに私たちの目の前から見えなくなるところに行ってしまう。それを孤立の川を越えるという表現をして、ここに川を流しました。もういいと。そうすると人から遠ざかってしまうので、徐々に徐々に、またさっきのループと同じで、社会とつながる力を失ってしまうんですね。社会とつながる力を失いながら、何ともいえない孤独の中であきらめの谷を越えてしまう。そうすると自死につながったり、孤立死につながったりします。日本は若者の自殺大国ですよ。ちょうど子若センターの年齢対象の39歳までの若者の死因の第1位は自殺なのは有名な話ですが、そしてそんな国は先進国のどこにもなくて、日本特異のデータであるということも有名です。

が、それは加速していて、女子中高生の自死は去年の倍になっていて、激しい勢いで、そのあきらめの谷を子どもたちが越えていくという瞬間、私たちも残念ですが立ち会うときがあります。そこを何とか食い止めたい。できれば、孤立の川を越えてほしくない。でも、孤立の川は川なので戻って来れるんですよね。越えても戻って来られる社会にもしたいし、そもそも孤立の川を越えなくていい社会にもしたくて、若者支援をしています。あきらめの谷は、そんな図でした。

○井村講師 ありがとうございます。僕も全国の自治体の応援をさせていただいているんですけども、よく使われるんですね、切れ目のない支援とか、横連携とかネットワークのような言葉が。では、実際の中身として何をしなきゃいけないのかという話を今からします。切れ目のない支援の中身とは何なのか。スライドでいうと8ページに、「よりそいサポーター」という記載があり、その一番下に親密な他者の存在が若者の回復につながるって書いてくださっていますよね。ここに何かヒントがあるんじゃないかなと思うんですけども、渡辺さん、このよりそいサポーターの話も含めて、子若センターでどのようにあきらめの谷を越えようとしている若者を、そうじゃない切れ目のない支援につなげているのか、実際されていらっしゃるのかというお話ししていただいてよろしいですか。

○渡辺講師 かしこまりました。先ほどの、この図ですね、経験から圧倒的に遠ざけられてしまっている若者の話をさせていただいたんですけど、だとしたときに私たちは、温かい経験の積み上げを土壌にしない限り、次に進めないだろうと思います。だとして、彼らに何をするのかというと、やっぱり手応えのある温かい経験を積み上げることを応援するということになるんですね。カウンセリングとか医療もちろん大事なんですけれども、その専門性より、私は圧倒的に関係性が、その若者を救うと思っていて。医師も含め。誰かとつながっているという記憶が人を生きさせるのであって、専門家がいるから人が生きていくわけではないというふうに思って、関係性というのをどうしても、その子若センターに取り込みたかったんですね。

なので、初めはなかった制度を名古屋市と相談して作りました。それが、よりそいサポーターなんですね。先ほども数字でお示しした600何件という稼働率といった、そこがこのよりそいサポーターさんに該当します。名古屋市子ども・若者総合相談センターの相談に来る若者を、ちょっとでもお手伝いしたり、一緒に遊んだり、気にしたりしたいよというふうに思ってください市民の方に登録、挙手をしていただいて、

登録をさせていただいて、その方に御活躍をいただいているというボランティアバンクです。今や、これ160名、ごめんなさい、これも1個前、古い資料を使っちゃった、今220名だったと思います。5期までに発展して。220名の方が何かしら若者の力になりたいし、若者気になるよというふうに登録いただいています。

私たちサポーターさんをお願いしていることは、ただ一つ、専門家にならんといてねということなんですね。専門家になってしまったら、私たちと機能が一緒になってしまう。なので、その子が発達障害とか精神障害とか統合失調症とか引き籠もりとか不登校とか、そういうことはもちろんあるんだけど、その専門性の責任は私たちが全部背負うので、よりそいサポーターさんたちはただただひたすら若者と遊んだり、趣味を御一緒したり、若者にゲームを教えてもらったり、昆虫を探しに行ったり、そんなことをしてほしいというふうをお願いをしています。そういう友達ではないんだけど、家族でもない、でもひょっとして友達より自分のことを心配してくれるかもしれないという友達以上家族未満という言い方、あるいは親密な他者、その若者が気になって気になってしょうがない大人が地域に5人いるというような、その存在が若者を明らかに回復させていくという姿を私は何度も見ました。

これはよく話すお話なんですけど、私たちのような若者支援の専門家が強迫神経症といって周りが汚いというふうに思ってしまったって、地下鉄にも一切乗れない、私たちが面談のときに差し出したお茶にも手をつけられないみたいな子が、28歳で来所しました。「僕はあと2年で30です」と。30までにどうしても働いていたいといって意を決して来てくださったりすることはよくあるんです。そういう方を私たち専門家だけで見立てると、この子を医療につないで強迫神経症を直して仕事探して、2年で実現するかななんて思ってしまうんです。でも、そこに面談に来るたびに彼が大好きな囲碁と一緒に打ってくれるボランティアさんも御一緒してもらおう。彼は、そのボランティアさんが好きになり、実はあまり囲碁が強くないボランティアさんに、時には勝たせてあげたくて自分にペナルティルールを作ってきたりするようになるわけなんですね。関係性ですよ。そのボランティアさんが、ぽろっと、そういえば何々くんと、子若センターの前の喫茶店にアルバイト募集って出ていたよみたいに言うわけです。これ実際あった話なんですけど、彼はその足で応募して受かって、週4、週5働くボランティアリーダーに、今やカフェの稼ぎ頭で、稼いだお金でずっと夢だったウェブ、ホームページの作成の講座、学校に入学して、今、デザイナーとして活躍をしている

んです。そんなことが起こせるなんて、専門家がなかなか思えない。しかも、それに1年かかっていないんです。私たち3年かかるかなと言っていたのに、その密度や豊かさや期間の凝縮という意味でいえば、抜群によりそいサポーターさんの力が必要なんです。それを切実に感じています。私たちは、そういう存在の人たちを親密な他者というふうに呼んでいます。

○井村講師 ありがとうございます。渡辺さん、11ページのスライドをちょっと表示していただいてもよろしいですか。

○渡辺講師 11ページは何だったかな。ちょっとお待ちください。

○井村講師 ポストイットがいっぱい載っているスライドです。

○渡辺講師 はい、井村さんも貼ってある。

○井村講師 僕も先月、名古屋の子若センターに行ってきたんですけど、子若センターの壁に、このポストイットがぶわーっと一面貼ってあるんですね。若者をとりまく社会資源マップというタイトルありますけれども、専門家連携、個人連携、いろいろあります。よりそいサポーターさんのような個人とのつながりをスタッフ全員で若者支援の地域資源として共有できる。名古屋では、地域の財産というふうにおっしゃっていましたが、その地財を、この子若センターに集めて、ハブになるという話がありましたよね。この包括的な支援って何なのかというと、関係性の困窮を、どう補っていくのかということがテーマで、それを名古屋市では実践されておられて、僕が地域力の大田区に名古屋市の実践を紹介したいなと思った理由は、ここにあります。恐らく、大田区の皆さんも鍵は地域力にあるというふうに思っておられて、子若支援をですね、地域力推進に紐付けておられるのかなと思っています。僕はいろんな全国の自治体のサポートをさせていただいていますが、地域力の大田区にしか、実現できない取り組みができるのではないかと、実はすごく期待をしています。

冒頭で、オランダ・ミラクルの本の紹介をさせていただきましたが、そこでは、コペルニクス的転換が行われたという話がありました。社会的孤立とか孤独が起こっている環境要因の改善をこれまでの積み重ねの上に行うのではなく、コペルニクス的転換で行うということは参考になるかもしれません。

一つ、もうずいぶん昔の失敗事例を申し上げますが、今日も民生委員の会長いらっしゃっていますけれども、僕がアドバイザーをさせていただいている自治体で、子ども若者を取り巻く地域ネットワークづくりを民生委員さんのネットワークを活用して進めよう

としたんです。そうしたらうまくいかなかったんです。多くの民生委員さんが、大田区もそうかもしれませんが、自分たちはお年寄りに、関わるのが主だと思っておられる方が多く、子ども若者支援もという役割意識を持ちづらいという実情が分かったんです。当時は若者支援は新しい取り組みなのでどう進めていいか分からないという状態だったのですが、先ほど渡辺さんから紹介のあった、よりそいサポーターという、それをやりたい人の気持ちを丁寧に集め、アセットですよ。渡辺さんは「やりたいこともちより、困りごと掛け合わせ」と教えてくださいましたが、人々が持っている力、やりたいという気持ちも含めて一人の子ども若者のために集めてつなぐ、ということを丁寧に実践されておられます。丁寧な子若センターの取組として、困難を抱える子どもと若者を切れ目なく結ぶことによって支援をする。関係性の困窮という環境要因を変える転換を実践されておられます。今日僕の話あまりする時間はないので、とどめますけども、今いろいろな学校に毎日のように若者支援に入っていています。今日も校長先生がいらっしゃるんですが学校の校長室の中で校長先生と一緒に仕事したりとかもしています。何でかと申しますと、まさに学校卒業した後に、これは先生方が一番御存じですけども、大人たちの支援が切れていくんですよ。その後に一部の子ども若者が渡辺さんたちの子若センターでつながっていくのですが、あきらめの谷の深いところに長期間いざるを得ない子ども若者たちがいる。だから、子若センターの職員がセンターで待つのではなく、アウトリーチに行かれておられるんだと思います。僕の場合は、学校の中とか、あと少年院という話はこの前もさせていただきましたけども、困っている人に気づいている、接触している大人がいるところで、地域の大人たちが出会って、切れ目なく支援をできる、関係性の支援ができるというのは、一つの理想的な若者支援じゃないかなんていうふうに思います。

では、17ページですね。若者支援のグラデーションというので、信号の絵があると思うんですけども、こちら渡辺さん、お話ししていただいてもよろしいですか。

○渡辺講師 ありがとうございます。ごめんなさい、ちょっと引きずって、さっきの社会資源マップの話なんですけど、あれ一つ一つに親密度がついているんですね。ひとつひとつが全部顔の見える関係性なんですけど、スタッフや私たちの。どれぐらいの関係性かをそれぞれに記してあります。私の言うことなら大抵聞いてくれる大人だよとか、名刺交換したぐらいだよみたいのが数値でついていて、それは本当に、あれは飾ってあるだけじゃなくてリアルに使っているんですね。私たちがネットワークを失敗

するとしたら、二つしか理由はなくて、一つはネットワークのためにネットワークを作ろうとしたとき。ネットワークが作りたくてネットワーク会議みたいにしたときに、それはやっぱりなかなかうまくいかない経験、私も100も200もしています。そうじゃなく、この子のために力をかけてほしいんだよねというリアルなお願い。その子どものために一肌脱いでくれないかなという具体的なお願いが地域を編んでいくんだなというのは学んでいます。

もう一つ、失敗しない方法だなというふうに思っているのは、そのお願いをする人に苦手なことを頼まない。その人が持っている昆虫が好きだと、テニスなら任せておけ、釣りなら連れて行ったるということを、ほんの少し踏み出せば、その若者に届くようなことを、あるいは自分が逆に楽しんじゃうようなことをお願いするという、この二つのセットかなというふうに思いました。その二つを発揮して、周りの大人たちに手を借りていかないと私たちの力だけでは足りなくて、どんどんどんどんバトンを渡していかないと、私たちさっきの1万件の相談件数の中で自分たちが死んでしまうんですね。若者の一生を私たちが寄り添うことはできないわけなので、そのバトンを渡してくれる人をいかに見つけ出すかということがネットワークづくりであるなというふうに思っています。

○井村講師 渡辺さん、ありがとうございます。会場入り口に、ポストイットの拡大の写真を僕、名古屋で撮ってきて、実は掲示しています。そこに親密度の解説とかもしてありますので。消毒液があるあたりに、貼っていますので、お帰りの際にぜひ御覧になっていただいて、参考にしていただけましたら幸いです。渡辺さん、ありがとうございます。最後に信号の話をよろしくお願ひします。

○渡辺講師 今、私たち若者支援では、若者のグラデーションを表現するのに信号機をよく使います。青が健全育成がかなっている、自分でいろんな選択ができる、チャレンジ、失敗ができる若者です。黄色が、ちょっと不器用で注意や見守りが必要なんだけど、何とかぎりぎり仕事についていたり、学校に行っていたりする若者です。赤が、そもそもやっぱり誰かの手助けが必要で、福祉や支援の必要がある若者、既にそういうところにつながっている若者だとします。この信号機のグラデーションにコロナ禍、変化が起きているというふうに思っていて。それがこちらなんですけど、青信号の子、先ほどの関係性の図でいえば、この就職期に就職ができなかったとか、あるいは文化祭とか、そういうものが全滅になってしまったというような経験の疎外が起こって

る中、彼らが社会に適応して進もうと思ってきた社会的なルートが閉ざされてしまったことによる、その器用な若者ならではの絶望というのがとても大きいなというふう  
に思います。そこが新しい課題です。そして、最も私たちが注目しているのが黄色信  
号の子たちなんですけど、黄色信号の子というのはコロナ前、青信号の振りをしてい  
ました。例えば、大学生でも、本当はちょっと知的に大学に入るにはぎりぎりだけ  
推薦で入ってしまった。でも、履修登録の仕方とか授業のノートテイクとか、どうも  
至らないということ、そこに来ている学生同士のナチュラルなサポートの中で何と  
かやれていたんですね。大学に行っているという時点で世間からは青信号に見えてい  
た。でも実は、とてもリスクをはらんでいて、今コロナ禍において、そういう友達  
のナチュラルサポートが得られないとなった途端、しかもリモートでレポートを提出し  
なきゃいけないとなった途端、全くついていけなくなって、学校の先生も連絡が取れ  
なくなってしまうたり、あるいはぎりぎりの困窮の中でアルバイトをしながら何とか  
学校に通っていたんだけど、学校に来ると平気な振りをしていた子が、コロナで飲食  
店が閉まってしまってアルバイト先がなくなり、学費が払えなくなって退学したりと  
いうことが、もう本当に湧き上がっているんですね。この黄色の子たちの特徴は、相  
談が苦手なことです。今まで青信号の振りして格好つけていたので、今さらSOSを  
出したくないし、そもそもどう出していいかわからない中、誰かに何とか助けてもら  
ってきたので、専門機関へのSOSの出し方がわからない。ここがごっそりと誰も手  
をつけられないゾーンになっていくんですね。この黄色ゾーンのところの若者を、ど  
う発見し、どう格好つけさせてあげながら相談に乗るか。そして、彼らの回復をどう  
見守るかというのが今後、若者支援にとって新しいチャレンジになってくるだろうと  
思っています。

- 井村講師 ありがとうございます。僕たちの支援の現場では、もう支援の場所に来てね  
とか、何か相談機関があるからおいでよという呼びかけはしていません。例えばですけ  
ども、ソフトボールやりたいんだけど、メンバー足りないから来てくれないかという、  
食べるボランティアとして来てくれないか、とか、よく居場所と出番と違って言われま  
すけども、その出番をどう作っていくのかというのは、それはそれぞれ一人一人の尊厳  
に関わる部分だと感じています。僕が最初に、オランダミラクルの本で、なぜコペルニ  
クスの転換の話を紹介したのかと申し上げますと、子ども・若者支援行政においてもコ  
ペルニクスの転換がひょっとしたら必要かもしれない、と感じたからかもしれません。

行政もこれまで一生懸命子ども・若者支援をずっとやってきているわけですが、事務事業として進めるからには縦割りにならざるを得ず、大切な横つながりやネットワークを機能させるのが難しく、孤立孤独が生まれ続けている一因になっていると思います。平成22年に施行された子ども若者育成支援推進法も法律の条文の中でその課題について指摘し、地域でネットワークを創ることを主旨としています。横つながりやネットワーク、それがなかなか十分に実現できていないということを考えたときに、今までやってきた延長線上でそれをまた行うということに本当に答えがあるのだろうかということを現場では感じ、一つの事例として紹介させていただきました。

では、今から、3時20分まで一応質疑の時間になっていますので、まだちょっと説明できていないスライドもあるんですけども、僕と渡辺さんと皆さんと一緒に考えていくことをぜひ20分間したいというふうに思いますので、何なりと御意見をいただければなというふうに思います。いかがでしょうか。

○今井地域力推進部長 御質問等ある方は挙手をお願いします。

○井村講師 ちなみにもう1個だけ説明したかったのは、27ページの表です。名古屋の子若センターは最初に専門的なネットワークを地域でつくられました。

その上で、関係性のネットワークを発展させていくという、順番で行っておられます。イメージとしては、民生委員さんとか、地域の自治会長さんとか地域で困りごとを抱えておられる方に気が付かれると思うんです。困難を抱えている若者に気づかれた人が関わられるときに、専門性の活用が必要になってくることがあり、やっぱり専門家ネットワークがある子若センターというのがハード的には必要なんです。

ただ、先ほど申し上げましたように、縦割りでずっと行われているものって、なかなか横連携しづらいので、専門的なネットワークの発展をさせながら、発見・誘導・支援・出口・定着というふうに、この前も申し上げましたけども、若者支援には5つの段階がありまして、それに気づいている方と共に支援をしていくということの子若センターでは進めて来られたというふうに思います。

今日は、絶対時間がないなというふうに思っていたんですけども、無理を言って渡辺さんにリンクサポートの資料もつけていただきます。それは41ページからはじまります。若者支援、先ほど申し上げました発見誘導支援と進むんですけど、その後、進学したり、就職したり、もっと言うと、進学も就職もしないんだけど、自分は自分のままで地域の中に居場所があるんだなと参画ができたり、役割を感じられるとこ

ろがあることはすごく大事だなというふうに若者支援では感じているのですが、実は、名古屋市さん、リンクサポートという、人に仕事を合わせる環境支援型の若者就労支援にも取り組まれています。今ある求人票のように、あれとこれとこれができないとあなたは働けませんよということではなくて、あなたのこのスペシャリティを生かして、うちの職場でぜひ働いてほしいという、そういう求人開拓をこのリンクサポートというところでされていて、東京都も実は2019年からソーシャルファームの創設を支援ということで、まさに同じ、人に合わせた仕事をつくるということをすすめておられます。

○永井委員 最後のところで先生のお話にも出たんですが、ちょうど渡辺さんのお話は関係性のネットワークというのがすごく大事だということで、とても大事な御指摘だなというふうに伺ったんですが、一方で専門的なネットワークというものの必要性ということも否定されていないわけですが、先ほどの井村さんのお話も専門的なネットワークと関係性のネットワークと二つ並列されているんですが、この二つの関係ですね。実際に活動されていく中で、両者の関係というのは割とスムーズにいくことが多いのでしょうか。あるいは、その間にいろんなやり取りがあるといいますか、そういう形になっていくものなのか、その辺りについてお話を伺えればと思うのですが。

○井村講師 永井先生、ありがとうございます。それは、12ページの表で多分渡辺さんが説明してくださると思います。たった一人の相談者のためにオーダーメイドのチームをつくる営みというふう書いてあると思うんですけど、渡辺さん、お話しただいてもよろしいですか。

○渡辺講師 私たちのネットワークは、そうはいつでも、じゃあインフォーマルな市民のネットワークの数と、専門機関のネットワークの数のどっちが多いかというと専門機関のネットワークの数のほうがやっぱり多いです。そこは、この8年の中で様々な試行錯誤を重ねながら、横のつながりをつくってきました。先ほど言ったように、ネットワーク会議とか、あるいは、望まない妊娠をしてしまった女の子のためのチームをつくろうみたいなことも散々してきたんですけども、やっぱり御本人というものが目の前にいない中、テーマだけでネットワークをつくることの効率の悪さというのを感じてきました。

私たちが公も民も併せた本人のために一肌脱ぐ人を立場を超えてかき集めちゃうというネットワークにしたのは、最終的にはそれが一番効率よくネットワークが生まれる

からだというふうに思っているし、誰一人そこに当てはめなくて済むからなんですね。機能として児童相談所はあるよね、といって連れてきちゃうと、児相の機能は全部児相が果たしてくださいという、できないことを押しつけてしまうことにもなりますし、ボランティアさんにここはちょっと一肌脱いでよと、苦手なことを頼んでも、そこまでは若者のためにできないよと。暇じゃないんだからみたいな話になってしまいます。なので、私たちがしているのは、たった一人の相談者さんのために、一人一人、その立場立場の得意分野のみを持ち寄ったオーダーメイドのチームをつくる営みなんですね。

少しスライドショーで御紹介をすると、私たちは訪問などをしながら、その若者を発見していきます。その発見した若者に対して、一人担当がつくんですが、その担当が先ほどお伝えした親密な他者をボランティアさんにつける前に、まず一番初めに出会う信頼してもいい大人になり得るような関係性をつくっていきます。

子若センターのスタッフの何々さんなら信じてもいいと子どもが思えるぐらいまでの関係性をつくるために、それこそ専門家として、時に友達としての要素、関係性を発揮しながら、川に行ったり、海に行ったり、水族館に行ったり、カフェに行ったりするわけです。お話を聞いたり、ときに一緒に泣いたり、そうすると、何々さん、例えば、山田さんの言う、この間言っていた若者の居場所なら行ってみたいとか、あるいは、渡辺さんがこの間紹介してくれた発達障害を診れるドクターのところなら、ちょっと僕行ってみようかなみたいなふうに言ってくださるんです。

そのときに、前半でお伝えした膨大な私たちのネットワーク、公民を超えたネットワークの中から、それは公的か、民間かは気にせず、本人にとってまず何が最初、ファーストアプローチとして必要かを考え抜いて、きちんと丁寧に私たちも同行しながらそこにつなげるという経験を一度します。そうすると、彼らは誰かにつながると助けももらえるんだと、自分の話を聞いてもらえるんだという体験に経験も積み上げになりますので、じゃあ今度ここに行ってみたいとか、前に紹介してくれたあの会社にも見学に行ってみたいみたいに言ってくださるようになる。それをどんどん、どんどん私たちは開拓してネットワークにしていくんですね。

最終的には、その御本人のために一肌脱ぐと言ってくれた御本人のことを思っている大人しか集まっていない輪ができるんです。これは、非常にトラブルも起きないし、前向きだし、発展的だし、絆も強いので、壊れがたいチームになります。そうすると、

それが楽しそうなので、地域の人たちとか、別の企業の社長さんとか、あるいは別の専門機関の心ある人とかがちょっと混ぜてよ、それ楽しそうだねというふうに寄ってきてくださる。そうすると、ますます発展として、ネットワークが広がっていくというふうになっていきます。

肝なのは、この円の中のメンバーの中にできないことを彼に届けたい。このメンバーでは持ち寄れないことを一つ彼にチャレンジさせたいときに、例えば、こういう機能が必要だ、例えば、敷金・礼金・保証人なしでアパートを貸してくれるような大家さんはいないだろうかみたいなことになったときに、そのないものをどこかそれは専門家であるあなたたちが見繕ってきてくださいよということではなく、みんなで探しにいこうというふうに、地域に探しに行きます。そして、ないものはつくったりもしません。それがその真ん中の開拓の部分ですね。

そうして、若者一人を取り巻く、たった一人の若者のためのオーダーメイドのチームをつくる営みが、最終的にはこのもやしなんですけど、もやしをこのように取り囲む、その円と円がまたつながったネットワークになっていくという感覚は、この8年で得たことの一つかなというふうに思います。

○井村講師　だから、お世辞でも何でもなく、大田区さんが地域力推進部に子ども・若者支援を置いておられるというのが本当にすごいなと期待をしているんですね。すみません、もう1個ちょっとつけ加えになるんですけど、若者支援って相性がやっぱり大事なんです。専門性も大事なんですけど、何か皆さんもありませんか。この人だったら話してもいいな、話しやすいなという感覚。

選択肢がなくて、自信がなくなって孤立していく子ども若者にとっては、相性がいい人とか信頼できる人に出会える場所を多様に展開していくというのがすごく大事なので、例えば、何とかセンターをひとつつくってみたいな話だけだと、多分この問題は解決できなくて、そうではなくて、本人たちに選択肢を持てるような多様な居場所を、例えば、リモートとかオンラインとかも含めて、今の時代どう確保していくのかとか。例えばですけども、これは名古屋でもどう解決しているのかというのは、渡辺さんに聞いてみたいところですけど、車椅子の人とかは何か居場所に通いたくても通えないかもしれませんよね。でも、オンラインでそういう場所をつくってくれたら、実はそれは全く障害がなくなる、例えばそういうことですよね。対面したところでは、自分の清潔度が気になってそういう場所には行けないという子には、そこに行くしかない

んだよというふうな呼びかけしか今までできなかつたんだけど、オンラインだったら、もしくは顔を出さなくてもいいよみたいな話だったら、そこは解決できるかもしれません。お詳しい方もいらっしゃると思いますが、一部の若者たちは既に当たり前のようにSNS等で相談を始めています。そういうふうなことを今まで延長線のことはもちろん大切にしながらも、しかし、そこ以外にも答えがあるんじゃないかということを通じてこの若者支援の話を考えるときは、一つ皆さんにアイデアを出すベースにしていただけると嬉しいです。

○玉川委員 副区長の玉川と言います。今日はありがとうございます。

○渡辺講師 ありがとうございます。

○玉川委員 子どものいろいろな置かれた状況を名古屋市さんのほうの渡辺さんは、インフォーマルな一つの力として、よりそいサポーターという、そういう仕組みの中で取り組まれていると伺ったんですが、実際に一人一人の状況によっては、経済的な困窮が要因であったり、あるいは健康であったり、あるいは就労の問題であったりということで、フォーマルな支援というのもしっかり織り交ぜながらだと思えます。

そこでお伺いしたいのは、ここのセンターのよりそいサポーターというインフォーマルなその力と、それから、名古屋市さんが持っているフォーマルな力をどのような仕組みで融合させているのか。例えば、福祉であったり、健康であったり、役所はそれぞれ窓口があるんですけども、そこをどう連携を図られているか、あるいは何か一体的な窓口が名古屋市さんにはつくられているのかどうか、その辺を教えてください。

○渡辺講師 ごめんなさい。ちょっと音声で、こちらの音声の状況が鈍いのもありまして、こういう質問をされているかの確認ができたらと思うんですが、公的な、例えば、深刻な病気ですとか、困窮とかがあるときに、やっぱりよりそいサポーターでは賅い切れることではないとしたとき、公的な窓口をどのように子若センターとして使っているかということによろしかったでしょうか。

○玉川委員 はい、お願いします。

○渡辺講師 ありがとうございます。先ほど申し上げたように、私たちのつながっているところは、ほとんど本当に公的なところなんです。病院は公的というか、病院だったり、いきいき支援センターだったり、障害の基幹センターだったり、生活困窮者自立支援法の窓口だったり、様々な専門分野の窓口が今設置が進みましたよね、ここ5年、10年で。そこの連携というのは、日常的なんです。

なので、日常的過ぎてスライドにはしていないんですけども、まず困窮しているときに、困窮をどう解決しよう、生活保護の申請を誰がして、どのように進めようとか、あるいは、重い障害がある方に関して、その障害を丸ごと支えるための障害者の基幹センターと組んで、生活を支える手立て、福祉サービスで取り囲もうとか、あるいは、その困窮している家庭の、困窮している若者、でも一人暮らしをしている、生活保護を受けたくない、でも障害福祉手帳を持っている、だとすると、その障害福祉手帳を使って、障害年金を申請しようみたいな専門的ないわゆるケースワークというのが私たちの仕事の実はメインではあります。

そこにプラスオンしてインフォーマルな力も借りないと、若者支援としては、最終形にならないというだけで、基本、私たちはケースワーカーでもあり、そこにプラスソーシャルワーカーとして市民の人を取り込んでいるという形の構図です。ごめんなさい、説明が不足していたかと思いますが、日常的に専門機関と連携をしながら、その方の安全と安心と暮らしを守るということは、もう日々のメニューの一環です。

- 玉川委員 ありがとうございます。最後に1点だけ教えてください。名古屋市さんの、渡辺さんの取組に対する体制というんでしょうか、窓口として一本化されたものが体制として名古屋市さんはお持ちになっているのか、それとも、つかさつかさで窓口が名古屋市さんはお持ちになっているんですが、そこと一つ一つ連携をするような、そんな仕組みが既にできている中で活動されているのか、そこはどうでしょうか。
- 渡辺講師 ごめんなさい。質問の意味が。
- 井村講師 子若センターっていろいろ連携していると思います。市役所には福祉部署とか、それぞれ就労部署がいろいろありますがそれぞれ、縦割りになっていて、子若センターはそれぞれの行政の部署と実際どういうふうな仕組みでつながっていますか、という、御質問だと思います。
- 玉川委員 じゃあ、もう少し補足します。名古屋市役所さんにも福祉部があったり、保健所があったり、あるいは就労を支援する窓口があったり、それぞれがあると思うんですが、ともすると、縦割りになって、渡辺さんが取り組むケースを一体的に処理しなければいけないところを縦割りであるがゆえに、ちょっと難儀しているような、そんなことがあるのかどうか、うまくいっているとしたら、どんなところに要因があるのか、そこをちょっと教えていただければと思います。
- 渡辺講師 分かりました。ありがとうございます、説明してくださって。ごめんなさい、

それもちゃんとした答えになるか分からないんですが、名古屋市の縦割り、行政の縦割りは私たちの関与の外に実はあります。

変な話なんですけれども、子ども・若者総合相談センターは名古屋市として、例えば、ひきこもり、不登校みたいな表看板はつけていなくて、0歳からおおむね39歳の若者であれば、どなたでも応援をしますし、どんな困りごとにも相談に応じますという、総合相談センターの立ち位置をとっています。しかもそこで行政の方々とケース受理会議みたいなものもないんですね。なので、その関係各所で話し合っ、このケースをどこが担当するかみたいな受理会議、ケース受付会議みたいなものも実はないんです。

なので、うちで受けた、窓口で受けた相談は、多くの若者が複数多岐にわたる困りごと、障害、病気、困窮、コミュニケーションというふうには持っていますが、それに該当する行政の部署がどこだろうというケースワークの仕方はしてなくて、私たちが知っている包括支援センターの何々さんと、あとは障害基幹センター何区の何々さんと児童相談所の何とかさんと、インフォーマルな大家さんのAさんと、このチームでこの人を応援しようという組み立ては、民間人である私たちが行政の縦割りに関係なく勝手に突破してしまうので、その行政の縦割りが現場の支援に影響するという感覚はほとんどないです。答えになっているかな。

○井村講師 なっています、なっています。個別に一人の人のために集まることを呼びかけてずっと実践されておられるので。ただ、これを大田区全域とか、名古屋市全域でどうかという話になったときには課題も出てくると思います。実は、僕は岡山の勝央町という、町のアドバイザーもしてきたのですが、そこは1中学校、2小学校区域に1万人ぐらいが住んでいるんです。多分、それぐらいの学区域にこういうセンター機能が本当はあって、それぞれの部署を超えて、外部資源も活用しながら地域でつながり合えるようなことが理想的だと感じています。子どもだと学区外に一人で行くことが難しい場合もあります。規模の問題ですね。包括支援センターとかが学区ごとになっているのは、多分それが理由なんだと思います。

今重層的支援体制整備事業とかも進みつつあって、いわゆる縦割りの予算的な配分を重層的にやっ、ていこうみたいな、例えば、保育をやっている人が介護にも関わろうみたいなところが、国としては進めようとしていたり、あと教育のほうも、そういう場所を問わないような「個別最適な学び」と「協働的な学び」みたいなものが行われていると

というのは、大きな行政的な流れの中で、僕は地域力の大田区では時代を創っていくような取り組みができるんじゃないかとすごく期待しています。最後にちょっと述べさせていただきますが、地域の未来を創る、公務に関わる、公務員が最初の要だと感じています。なので、今日は議員さんとかもいらっしやっていると思いますけど、ぜひ公務員を増やしていただきたいんですよね。私もそうだったのですが、地域全体や将来のことについてデータを見ながら鳥の目で俯瞰しながら日々の目の前のことに向き合っていく、創っていくことは簡単ではありません。民間の人が公に関わること、みんなで地域の未来を創っていくとしたならば、そのハブとなる公務に関わってくださる人が、学校の先生も含めてやっぱり増えてほしいなど。なかなか難しいかもしれないんですけども、そう感じています。

慶応の小熊英二先生が地域について考えてみたという、本を書かれているんですけど、そこでは今日もいらっしやるとは思いますけども、民生委員さんとか、保護司さんとかに地域福祉を担っていただくような、そういうこれまでの取り組みについて、小熊英二先生は安上がりの国家というふうに表示されていました。必要なところにはちゃんとお金を、今の流行りの言葉で言うと分配していくということが必要なのかなというふうに思います。ありがとうございました。

渡辺さんもありがとうございました。渡辺さんに拍手をいただければありがたいです。

(拍手)

○今井地域力推進部長 それでは、渡辺様、井村様、今日は大田区にとっても本当に勉強になる、また考えさせられるお話をありがとうございました。皆様、いま一度渡辺様、井村様へ拍手をお願いいたします。

(拍手)

○今井地域力推進部長 どうもありがとうございました。では、これからは議事に移ります。

ここからは、座長の永井委員をお願いいたします。よろしくをお願いいたします。

○永井委員 いいお話で、もう少し時間があってもいいと思いますし、司会もこのまま井村さんをお願いしたほうがよろしいのではないかと思います、一応引き受けさせていただきます。

審議のほうですが、今の御講演とも当然関わるわけですが、今年度のテーマは次第にありますとおり、「困難を有する子ども・若者やその家族に対する切れ目のない支援

及び地域ネットワークの強化」についてというふうになっております。

まず、これは仮称でございますが、大田区子ども・若者総合相談窓口整備の考え方の案というものについて御報告がありますので、青少年健全育成担当課長からお話をいただきたいと思っております。よろしいでしょうか。

○佐藤青少年健全育成担当課長 それでは、お手元の資料2番に基づきまして、大田区における子ども・若者総合相談窓口整備の考え方について御説明させていただきます。

先ほど、御講演いただきました井村先生にも、これまで様々な御助言を賜りながら、こういったイメージなどをつくってまいりました。大田区におきましても、今年の3月に子ども・若者計画を策定させていただきまして、その中の重点事業としましても、子ども・若者を取り巻く地域ネットワークの整備も挙げさせていただいたところがございます。先ほどの名古屋市での取組なども参考とさせていただきながら、大田区におきましても、子ども・若者総合相談窓口を整備していきたいといったことで、今回お示ししているというところでございます。

お手元の資料の2番を御覧いただければと思います。子ども・若者総合相談窓口と居場所の機能、この二つを連携させながら、子ども・若者の自立に向けた支援を行っていきたいというところが柱でございます。先ほど、名古屋市の取組でもありましたように、居場所での機能、居場所においては、こちらに書いてございますように、イベント型、常設型とございますけれども、誰でも気軽に立ち寄って過ごすことのできる常設型の居場所、それから、それぞれの一人一人のオーダーメイドとしての支援の在り方として、イベント型としての居場所、こちら二つを掛け合わせながら、居場所で過ごしていただきながら、相談体制につなげていくというふうなことを連携させながらやっていきたいといったところでございます。

イベント型におきましては、例えばですが、地域めぐりやライフスキル講座や学習支援など、様々な子ども・若者のニーズに応じたプログラムを組んで実施していきたいというところでございまして、こちらのイベント型の実施においては、地域活動団体様、地域との連携というのが欠かせないといったところでございまして、その点は先ほどの名古屋市での取組を参考とさせていただいているといったところでございます。

3番でございますが、相談の流れでございます。電話・メール・SNS等による相談を受けまして、そこから信頼関係を構築しながら面接相談に持っていきたいというところでございまして、対面での面接相談を通じて、その子の、その若者の課題を明確

化させていくというところ、ここに時間をかけていきたいというところがございます。

こちらで、右のほうの矢印にございますが、課題の明確化になった場合、明確化された場合は、それぞれ検討会議や支援方針会議などを行いまして、支援機関へ引き継いでいく。こちらは、先ほど名古屋市でもありましたような同行支援ですね。そういったところに支援していくというような流れ。それから、左側にございますが、居場所支援という形で、ただ単に話を聞いてくれればいいのか、人と人とのいざこざで悩んでいるだとか、特定されないような課題を抱えているような場合、居場所でまず過ごしていただきながら、課題を明確化していきながら、その子にあったプログラムを組みながら支援していくというような流れ。この2本の流れでやっていきたいといったところがございます。

4番でございます。4番を御覧いただきますと、若者が希望する支援方法が書いてございます。全体でいきますと、メール30%、SNS26%、年齢でいきますと、15歳から19歳の方々が希望する相談の方法としましては、メールが30.2%、SNSが32.2%ということで、若年層の方々は主にSNSによる相談の在り方といったものを希望しているということが見て取れるかと思えます。そういったことを背景としまして、相談体制の在り方としましては、電話やメールに加えましてSNSというものを活用した相談窓口というものの設置が必要であろうというふうに考えております。

5番でございますが、イメージでございます。先ほど申し上げましたように、メール・SNS等による電話相談を受けた後、対面に結び付けていきながら、支援方法を検討して、同時に居場所機能を活用した支援活動を行いながら、社会的な自立に向けた継続的な支援を行っていきたいというところで考えているといったところがございます。

ざっくりとした構想というのは、こちらでございまして、本日、皆様方より御意見を賜りながら、こちらの詳細について、今後また検討のほうを進めていきたいと思っております。

また、お手元の資料2-2でございますが、資料2-2をちょっと御覧いただければと思います。資料2-2でございますが、こちらはデータをお示ししておるところでございますが、こちらは内閣府におけます子供・若者の意識調査の結果でございます。

御覧いただいたとおり、ほっとできる場所、居心地のよい場所になっているかといったところで、それぞれの分野別でございますが。自分の部屋だったり、家庭だったり、インターネット空間、それぞれこちらに書いてあるものが比較していただきますと、全て下がっていると言ったところが見て取れます。最後、どこにも居場所がないと答えている方が増加しているというところで、彼らにとって、適切な居場所が現在ないというところがここで見て取れるといったところでございます。

次のスライドを、ページを見ていただきますと、子供・若者の居場所と自己認識の関係でございます。居場所の数が増えていけば増えるほど、自己肯定感や将来への希望、またチャレンジ精神など、そういったものが増加していくといったところが見て取れるかと思えます。

一方で、下のほうを見ていただくと、居場所の数と支援希望との関係でございますが、居場所の数が少なければ少ないほど、支援機関を利用したいと思わない、誰かに相談したいと思わない、そういう方々増えるということが見えるというところがございまして、こちらは非常に特異的な現象でございますが、先ほどあったような「あきらめの谷」といったところに落ちるのかなというふうにとちょっと理解しているところなんです。居場所が少ないことによって、相談したいとも思わなくなってしまうというところであるということであるとすると、居場所の数を増やしていくということ、それから、人と関わることを増やしていくことによって、人に相談してもよいと思えるようになるということを相関関係として見て取れるといったところでございますので、そういった意味で、相談事業においては、居場所の数を増やしていくということと、連携させていくことが重要であるかというふうに見て取れるというところでございます。

私からの説明は以上でございます。皆様から御意見をいただきたいと思えます。よろしくお願いたします。

- 永井委員 ありがとうございます。ただいまの御報告なんです。もちろん先ほどの御講演とも関わるわけで、非常に強く関わっているわけですが、何か御意見とか、御質問はいかがでしょうか。御自由に伺いたいと思えますが。
- 田中委員 青少年委員の田中と申します。よろしくお願いたします。昨年度もこういった形で講演を聞かせていただきました。その中で、今日もそうですけど、いいお話が聞けたなというようなことでもございましたが、昨年につきましては、その後話がど

う進んだのか、聞いただけで終わるのではなく、次につながるということがこの会議のある意味目的なのかなというふうに、私は感じております。

先ほど、手を挙げてお話を聞きたいなと、行政のほうに聞きたいなと思っていたんですが、今、課長のほうからお話があった内容を聞こうと思っておりました。それで、今、課長のほうから資料2のほうをお示しいただきまして、この中でちょっと私が思いましたのが、2番の子ども・若者支援体制（イメージ）といったところで、この居場所機能、居場所というのは、ある意味子どもたちへの、子どもだけではありません。大人も年寄りもそうだと思いますけれども、物理的な居場所、もう一つは精神的な居場所があるかなと思います。

今日のお話の中では、よりそいサポーターというお話がございまして、このサポーターは専門家でなくていいというようなお話を伺いました。専門分野は専門家に任せるといったところで、今日お示しいただきました資料の2番の中にあります居場所機能といったところで、やはりよく言われるのは行政は縦割りで、窓口はそれなりに対応する窓口があってということでございますが、この居場所機能というところを名古屋の場合は地区地区にそういう拠点があるようなお話で受け取りましたけど、そういった形のをぜひ大田区でもつくっていただいて、その中によりそいサポーター、今回よりそいサポーターという言い方をされていますけど、近所のおじちゃん、おばちゃんでもいいんじゃないか。そこに子どもであろうと、老若男女、誰が集まっていいからそこで時間を過ごせる。そういったところの人とのふれあい、昨年度の講演では、やはり人は人で育てられるというお話がありました。

やはり、私たちは大人になっても、子どももいろんな人と接することで成長していく、そこに居場所を見いだせる。そうしたことを考えたときに、やはりそういった集える空間というのがないと、昨今なかなか人が集まらないのかなと。必ずしも集まる空間だけではありません。今多様性という言葉がありますから、いろんな方面でいろんな受け皿をつくるのが大事かなというふうに感じております。

今大田区でも、結構出張所の移転だとか、建物の更新時期になっております。こういった建物の更新時期に箱物、行政の縦割りでポンポンと建てるというのではなく、その中の一面にこういった活動ができるような拠点として位置付けられるようなスペースが、最初のうちは専用じゃなくてもいいかもしれません。週に何回はここをこういうふうに使っていいですよとか、そういう発想からでもいいのでつくっていただけた

らいいのかなと思います。

昨今、隣に住む人の顔も知らないとか、そういう世の中というか、東京がそうなんでしょう。ですので、気持ちのある人が多様性と言いましたけど、ちょっと気になって行ってみようかなという人そこで拾うという言い方は違うかな、ちょっと言葉が悪いんですけど、そういったことができるような状況をつくっていったらいいのかなと思いますので、大田区の行政にはそういったものを設けてほしいなと思います。

資料2-2のほうですね。先ほど課長からも、子供・若者居場所と支援希望等の関係ということで、居場所の数に応じて相談、居場所のない人のほうが相談もあまりしないという傾向にあるということは、やはり人に対する接し方、人を信頼できない、日ごろからいろんな人に接していれば、先ほどお話にもありましたけど、この人には必ず相談できる、この人には相談したくないとか、そういった視点でも日ごろからいろんな人と関われる、関わっていると相談するに当たっても、自分はこの人に相談したいなと相談しやすい環境、逆に相談しているつもりはないけども、会話の中で自分がふとしたことに気づいて、誰かが分かってくれて、といったところでお互いのやり取りが人間の信頼関係とか成長を生んでいくのかなというふうに思いますので、ぜひ大田区の建物が老朽化して更新時期になっているというタイミングもかなりいいかなと思いますので、ぜひそういった建物を新しく建てる時には、そういった空間のスペースをつくっていただけたらいいかなと思います。

○永井委員 ありがとうございます。先ほどの御講演では、親密な他者、よりせいサポートということが非常に重視されてお話をいただいたわけで、この大田区子ども・若者総合相談窓口整備の考え方のほうの御説明では、居場所という言い方をされていますが、今御指摘いただいたように、居場所という意味は、もちろん物理的なものも含まれますけど、やっぱり単に物理的なものではなくて、そこで親密な人間関係がつかれるという場所という意味が非常に大事だと思いますので、またその辺りをぜひ昨年からの会議の中でも、何度と出てきていることですので、大事なことだなというふうに思います。

時間の問題もあるんですが、どうでしょうか。もうお一人ぐらい御質問があればぜひと思いますが。お願いします。

○和光委員 すみません、ありがとうございます。小学校PTA連絡協議会の和光でございます。子ども・若者の居場所をいろんな拠点をつくればいいというふうにこの資料

で書いてくださっているんですけども、僕は大田区でもいろんな連携をとれるきっかけ、小学生の子なんですけども、いいきっかけの一つが、ガーデンパーティーがいろんな大人とつながりが持てるチャンスかなというのがあって、もちろん自分の親も出展団体として関わるし、地域のお兄さん、またまたおじいさんとか、そういう方々に触れあえるチャンスのある場であると思っっているので、そういう中で楽しい盛り上げ、お祭りのような感覚から顔見知りが増えていくというのが、すごくいいなと思っっていて、けども、実情、ガーデンパーティーの実情がちょっと何かやっぱり負担になってきているよということだったり、あとお母さん方、何というんですかね、いいことを強要してしまう雰囲気があったりして、これはいいからすごくやろうよ、やろうよと言って、実は苦しんでいるということもあるので、なるべくそういう今あるいい活動を前向きに取り組めるように、取り込めるようにしていける仕組みというのが、もうちょっと働きかけというか、僕らの年代もそういう運営に関われるような感じにしていただければ、もうちょっと顔が見えるような地域のつながりができるのかなというふうに思っっております。

○永井委員 ありがとうございます。

○木田委員 すみません、ありがとうございます。中学校PTAの木田と申します。居場所について、やっぱり子どもの居場所が足りないというのは前から聞いていたんですけど、具体的にどういうものが望ましい居場所なのかなというのがすごくぼんやりとしていて、例えば、不登校の子どもが通う教室というのはどこか矛盾しているというか、学校に行きたくないという子が通える学校って、今回みらい教室って中学校のができましたけど、一見行きたくない子を行かせるというのはすごくハードルが高いんですね。

それはそれでももちろんそっちに通えるようになったというのは、すごく素晴らしいこととの場が一つあっていいと思うんですけど、この居場所をいっぱいつくったとしても、実際にそこまでどうやって引き込めるか、呼び出せるかとか、足を出してもらえるかというのが、それが大変なんじゃないかなというのをちょっと思っっていて、一番手っ取り早く私が考えたのは、前回ちょっと意見が出ましたように、最近子どもたちの居場所はオンラインにありますように、インターネットの上に例えば、ポケットWi-Fiとニンテンドースイッチとあつまれ何とかがあって、あつまれとかというゲームソフトを1個渡せば、そこでコミュニケーションの取れる居場所は最低限ネット上にでき

るんですね。

例えば、家からあまり出たくなくて、暗くなって行っちゃう子に対しては、オンラインでそのようなデバイスを渡したり、機械を渡して、そこに例えばボランティアの方が、ちょっと具体的にどうやるかは分からないですけど、オンライン上でコミュニティをつくって、そこで何か相談してあげるとか、そういうのができたらいいのかなと思いました。

あともう一つ、リアルな場所として文化センター、たくさんのサークルがとてたくさん活動をされていますので、例えば、私は卓球をやっていますが、卓球に来てもらうとか、囲碁のサークルとか、サークルがいっぱいありますので、そこに子どもたちに何とか入って、体験教室みたいなものをたくさんやって、そこでコミュニケーションをとっていくというのも、今あるリソースを使ってやれる手なんじゃないかなと思いました。

○永井委員 ありがとうございます。それでは、どうでしょうか。ちょうどおもしろくなってきたところというところなのですが、今のお話、御意見もとても大事だと思うのですが、では補足してください。

○佐藤青少年健全育成担当課長 先ほどいただきました、不登校に関する居場所に関して、ちょっと井村先生がいらっしゃっているのも、ちょっと事例なども踏まえてお話を伺えたらと思うので、よろしいでしょうか。

○井村講師 すみません。ガーデンパーティーは僕もいいと思っていました。大田区のホームページを隅々まで拝見してきたんですけど、渡辺さんから僕も学んだんですけど、やりたいことを持ち寄り、困りごとを掛け合わせるという、その二つで進めていくのが肝だということなので、何かありますよね。PTAとかも含めて、今若干負担感があるものをどうやりたいことに転換していけるかというのが多分肝で、今まさに田中会長からもお話がありましたけども、既存のものをどう公認していくのかというのは、名古屋では地財と呼ばれていますけども、アセット、新たにつくる必要はなくて、既に親密な関係がありそうなところを見つけていき、何でしょう、アレンジしていくみたいなことがすごく大事だと思います。

オランダ・ミラクルの中では、そういうことをする人をリンクワーカーと言っていて、結ぶ人ですよ、結ぶ人に予算をかけています。今、日本では支援する人には予算はついているんですけど、結ぶ人に予算が付き始めると大分地域が変わるんじゃないかなと

思います。

不登校の子の居場所の話 最後にしますと、居場所って人によっては月1回であったとしても意義があると感じています。僕は前回もお話しましたが、井村家地域開放という地域居場所を6年間、月1回、ちょうど今週の日曜日にもボランティアにやっているんですけど、そこに不登校中の生徒も来ていまして、今マインクラフトを4人でやっているんです。ひとりの小学生がマインクラフトをやっているところに小学生とマインクラフトをするボランティアとして来てねと生徒にお願いしているんです。支援を受ける人として来ているわけじゃなくて、主体的に来ているので、じゃあボランティアとしての在り方はどうなんだろうみたいな、ある意味大人の話ができるという、それぞれ一人一人の、オランダ・ミラクルではアセットと言っていますが、持っている力と何か子どもだからこうしなきゃいけないでしょうとかではなくて、あなたを大切にしているんだよというメッセージを発しながら、社会の中で役割をしっかりと伝えていくということがもうこの区のあちこちでできるようになるというのが、何か不登校支援にとどまらず最高なんじゃないかなというふうに思いましたので、すみません、長くなりましたけど、すばらしいPTA会長さんがいらっしゃってうらやましいです。ありがとうございました。

○永井委員 ありがとうございました。では、最後に私はぜひ会長でいらっしゃる区長からも一言伺いたいと思うので、お願いいたします。

○松原区長 どうも皆様、御苦労さまでございました。大変、井村先生、ありがとうございます。また、渡辺先生もお世話になりまして、大変有意義な参考になる、極めて参考になる御講演だったなと思います。

また、委員の方から大変すばらしい意見も出していただいて、ありがたいなと思います。

お話のとおり、今一番不足していると言いましょか、緊急性でやっていかなきゃいけないのが、やはり相談窓口ということと、それから、居場所ということだと思います。昭和の時代ってちょっと古いんですけど、何でもかんでもみんなが一緒にやっていくという、そんなような時代があったかなと思いますが、令和、平成の後から令和にかけて、やっぱり世の中というのが、非常に複雑化して、多様化しているんですね。ですから、人の生き方もかなりまっすぐ昔みたいなやり方じゃなくて、それぞれのやっぱり個人にあったものを作って、歩いていくという形になっているんだと思います。

それで、居場所の話なんですけど、今、お話しいただきましたけど、私も居場所がたくさんあれば、やっぱり自己肯定感になっていくと。そのとおりだと思うんですね。本来、一番居場所になるのは家庭だと思いますが、だから、その家庭も家庭としての在り方をもう一度やっぱり振り返る必要があると思います。

これは、学校もそうだし、地域もそうだし、みんなが今こういう時代になって、もう一度再認識をし、いいところは残し、変えていくところは変えていくという、今、先生が言っていましたけど、地域資源ってあると思うんですよ、私ね。特に、大田区の場合には、いろんなボランティアというか、地域の方が非常に活発にして、町を愛する人が、例えば、学校を愛する人がたくさんいます。そういった方々がやっぱりもう一度振り返って、自分の足元から考えていただくといいのかなと思っております。

居場所というのは、家族から始まり、学校もあれば、職場もあれば、またインターネットもあれば、地域もあれば、いろいろとあると思うんですよね。ただ、その子にとって居場所となり得るものがありますよね。野球が好きな子もいれば、違うものが好きな子もいる。野球が好きな子だったら、野球のそこからやっぱり居場所になってくる。そこでいろんな人生を覚えていくということがあると思うんですよね。だから、結構私は大田区はそういう資源が豊かなところじゃないかなというふうに思っています。ですから、居場所で特に大事なものは、居場所によって、自己肯定感ですね、これをつけていくことだと思うんですよね。なおかつ、もう一つ言えば、自立ができる、その子なりに自立ができる、そういうふうな皆さんのサポートとかが、自立ということは非常に大事な思っています。だから、やっぱり皆さんで助け合わないとなかなかそういうのが難しいかなとは思っております。

それから、相談ですね。これもおっしゃるように、悩んでいる子に対して、これは非常に今日よかったなというのが、よりそいサポーターというんですね。これは、専門機関でもない、本当にそういった悩んでいらっしゃる人にごく自然に話し相手になっていくという、ここが非常にいいやり方だなと思います。年齢構成とか、どういう方がやっているのかなというのは、もっとお聞きしたかったんですが、やっぱりこれからは相談機関に行く前に、その子の心の中に入ってあげて、一緒に聞いてあげる、このシステム。かなり民生委員の方とか保護司の方とかがプライベートの形で一緒に話を聞くんですね。いろんな話を聞いておりますが、そういう心のサポーターというんでしょうかね、話し相手という、そういうのが必要なかなと思います。

大田区は、今、おっしゃるように、いろんところで施設を直しております。できる限り、やっぱりこういうふうな子どもたちの居場所みたいな場所が確保できれば、割と今神経を使いながら、施設計画を進めているところでございますので、こういうことはこれからの時代、やっぱり大切だと思います。そういうことでございますが、やはり地域の方がいろんな層の方々が、分かれるんじゃないくて、一つにまとまって、一つのことを着実に話し合いながら、解決していく、あるいは、話していく、そういう機会が大事なかなと思っております。

本当にいいお話と、皆様のすばらしい御意見をいただきまして、お話がよく私も理解をさせていただいたところでございますので、これからもぜひ、皆様の御意見をいただければ、大変ありがたいなと思っております。

○永井委員 ありがとうございます。今日いただきました御意見については、事務局でまとめさせていただきます。

本日いただいた御意見のほかに何か補足や、追加の御意見がありましたら、ぜひ11月末ぐらいでよろしいのでしょうか。事務局まで御連絡をいただければというふうにお願いたします。

それでは、審議を終了させていただきます。長い時間、ありがとうございました。また、司会の不手際をお詫び申し上げます。

その後、青少年健全育成担当課長から今後の予定等について御説明をしていただけますでしょうか。

○佐藤青少年健全育成担当課長 本日はありがとうございました。今後の日程の御案内を申し上げます。

第3回青少年問題協議会は、令和4年2月2日、水曜日、午前10時から開催する予定でございます。開催の御通知につきましては、それぞれ開催の2週間前をめぐりに送らせていただきますので、またどうぞよろしくお願いたします。

○今井地域力推進部長 それでは、以上をもちまして、本日の会議を閉会とさせていただきます。皆さん、本当にありがとうございました。